大伴坂上郎女論　下

岡田喜久男

前稿に引き続き、坂上郎女が、歌世界において、いかに大伴一族を愛し、その繁栄を願っていたかを、彼女の歌を丁寧に考察することで証明して行くことにする。（尚歌番号は『国歌大観』による。また単に「郎女」とするのは大伴坂上郎女のことである。）

大伴宿祢稲公、田村大嬢に贈る歌一首　大伴宿祢麻呂の卿が女なり

586　相見ずは恋ひずあらましを妹を見てもとなかくのみ恋ひばいかにせむ

右の一首は、姉坂上郎女が作なり。

この歌も、左注によって実際は郎女の作であることが明かになっている一首である。ここに名が挙っている稲公は天平二年、郎女の異母兄・大宰帥大伴旅人が脚に瘡ができて重態になったとき、遺言を受ける為に都から来た一人で、郎女の同母の弟であると思われる人物であるし、巻八では甥の家持と歌を詠み交わしている。また、田村大嬢は題詞の下文と、坂上大嬢に贈った四首の歌（756～759）の左注によって、大伴宿奈麻呂の娘であり、郎女の娘、坂上大嬢と異母姉妹であることが明かであるから、郎女は宿奈麻呂と結婚したことも自から明らかになるのである。即ち、郎女は、異母弟と継娘（同居ではなかった）の間をとり持つ役を果している訳で、一族の結合を計る家刀自の当然の配慮であった。代作歌の問題については、その在り方の根本的な追求が必要ではあるが、今は、郎女が極めて実用的な目的で代作をした事実を確認しておくだけにしておく。なお、この左注については、『万葉集全注』巻第四木下正俊が、「考」の部分で

この左注は坂上郎女が弟の稲公の代作をやったことを知っている者の記入である。家持の聞き書きであろう。稲公自作の歌も巻第八〔一五五三〕にあるが平凡作と言ってよい。この歌も、歌才に乏しい弟の拙さを見かねた姉が代役を買って出たものと思われる。それにしても単調で新味がなく、坂上郎女もわざと手を抜いたのかもしれない。男女贈答の一面を物語って興味深い注記である。

と言うのがほぼ当を得ていると思う。とは言え、確かに平凡な作ではあるが、わざと手を抜く筈もなく、『万葉集私注』土屋文明が、この歌について、「普通のことを歌ふだけであるから代作でも間に

合うのである。」と言うように、この歌の力によって女性を得ようとする場合の作ではないから仕方がないと言えるのではなかろうか。

大伴坂上郎女が怨恨歌一首幷せて短歌

619 おしてる　難波の菅の　ねもころに　君が聞こして　年深く
長くし言へば　まそ鏡　磨ぎし心を　ゆるしてし　その日の極
み　波の共　靡く玉藻の　かにかくに　心は持たず　大船の
頼める時に　ちはやぶる　神か離くらむ　うつせみの　人か障
ふらむ　通はしし　君も来まさず　玉梓の　使も見えず　なり
ぬれば　いたもすべなみ　ぬばたまの　夜はすがらに　赤らひ
く　日も暮るるまで　嘆けども　験を無み　思へども　たづき
を知らに　たわや女と　言はくもしるく　たわらはの　音のみ
泣きつつ　た廻り　君が使を　待ちやかねてむ

反歌

620 初めより長く言ひつつ頼めずはかかる思ひに逢はましものか

この歌は、一見すれば疎遠になった男を恨む恋の歌であるが、その対象を誰と考えるかで、当然説が分かれてくる。名の挙がった男性は、藤原麻呂（『万葉集攷證』岸本由豆流）、郎女の異母兄で二人の娘（坂上大嬢・二嬢）を設けた大伴宿奈麻呂（『万葉代匠記』契沖精撰本）、大伴駿河麻呂（『大伴家持の研究』尾山篤二郎）等で、この他小野寺静子氏（「怨恨の歌」『万葉』七九号）のように、特定の相手ではないとする説、更には、大伴家持を怨んだとする説（寺田透『万葉の女流歌人』）などがある。これ等に対して、橋本達雄氏が『万葉』八四号で提出された、娘坂上大嬢に代って大伴家持に贈った代作歌ではなかったかとする説は極めて魅力的である。勿論決定的な事は言えないであろうが、橋本氏は、

しかし、大伴宗家の嫡男なる家持に自分の娘を嫁がせることが、大伴家にとっても郎女にとっても、はたまた大嬢のためにも、もっともふさわしいと考える郎女の心中では、いずれは家持もそのように思い、彷徨をやめて大嬢の許に戻ってくることを見通していたかもしれない。その経緯のせんさくは憶測の域にとどめるとしても、事実後年その通りになってゆくのである。そのような観点に立ってこの歌を読む時、従前からしきりに問題とした迫真性のなさも、見方によっては、家持と大嬢との間が決定的な手切れとなることを避ける意味をもたせた表現であるとすることができるかもしれない。

とその内容に立ちいって説を主張しておられる。

この歌の配列順からみて、作歌年代が天平三・四年頃（私見では天平四年の秋以降、五年も予想される）とするのが通説であるが、そうすれば、旅人亡き後十五六才の家持を盛り立てて一族の経営に取組んでいる家刀自として一種の宣言としても読み取れるように思う。「怨恨」の二文字が、一族外の人へ送られたと考えるよりも（勿論最初から題詞があったかどうか分らないが）家持へ送られたと考えると大いに意味を持ってくるのである。

(646)は『万葉集注釈』沢瀉久孝の説のように（角川文庫『万葉集』伊藤博も、(646)以下四首を「身内の坂上郎女と恋人同志を装った贈

答」と注している）坂上郎女に贈ったものと考えるので、四首(646)～(649)は同時に考えることにする。

646　ますらをの思ひわびつつたび数多く嘆くなげきを負はぬものかも（大伴宿祢駿河麻呂）

647　心には忘るる日なく思へども人の言こそ繁き君にあれ（郎女）

648　相見ずて日長くなりぬこのころはいかにさきくやいふかし我妹（駿河麻呂）

649　夏葛の絶えぬ使ひのよどめれば事しもあるごと思ひつるかも（郎女）

右、坂上郎女は佐保大納言卿の女そ、駿河麻呂は、この高市大卿の孫そ。両卿は兄弟の家、女と孫とは姑姪の族そ。ここを以ちて、歌を題し送り答へ、起居を相問す。

高市大卿は、『万葉代匠記』に「右大臣大伴宿祢御行ニヤ」とあるのに従うと、御行は郎女の父・安麻呂の兄であるから、郎女と駿河麻呂は娘と孫で、いとこ半の関係になる。又駿河麻呂は郎女の娘二嬢を娉った歌(407)があるし、前稿（『日本文学研究』第二五号）で述べたように、「族を宴する日に吟ふ歌」(401)は郎女が駿河麻呂に二嬢を与える許しの歌であったから、二人はまさしく、親しく「相問す」る間柄であった。『万葉集評釈』窪田空穂（以下『評釈』と略記する。）は(646)の「評」で

この歌で見ると、駿河麻呂が求婚している女に贈ったもののごとく見えるが、左注によると、以下三首の歌とともに、坂上郎女と贈報したものであることがわかる。またこれらの歌の性質も、姑姪の間で起居を相問うたものであると断わっているので、その左注を信ずるよりほかはない。思うに左注は、この歌に対して人が誤解を抱きはしないかと危ぶんで添えたものであろうが、まさにその要のある歌というべきである。巻三（四〇七）によると、駿河麿は坂上家の二嬢の、まだ婚期には達しかねる娘を娉っている。この歌で見ると、その娉いは成立ち、夫婦関係が結ばれたが、二嬢は郎女の保護の下にあり、駿河麿としては思うままには逢いかねる状態であったので、それを嘆いて二嬢に贈ったものではないかと思われる。報え歌は、郎女が二嬢に代って詠んだもので、これは坂上大嬢の家持に贈る歌を、母の郎女が代って詠んでいる例もあって、当時としてはさして特別のことではなかったと言える。

と言うのが正しいと思われる。(647)の「人のことこそ繁き君にはあれ」(649)の「ことしもあるごと思ひつるかも」は、駿河麻呂の女性関係を批難しているのであるが、母としての立場で歌われる場合を想像すれば、駿河麻呂も心中恐れ入らずにはいられなかったに違いない。郎女の態度を同じく『評釈』は(674)の「評」で

言い方は穏やかなものであるが、高く地歩を占めて言っているものである。

と言い、駿河麻呂の(648)の「評」では

これは久しく逢わずにいる妻に対しての心とすると淡白なもので、親族の長上としての郎女に対してのものとも見られるものである。駿河麿としては、こういう言い方をする必要のあってのことと思われる。妻が郎女の意志次第の者であり、相聞の歌が郎女

の眼を経るものであるとすれば、立ち入ってのことは言うまいとしたのかもしれぬ。

と言うのが当を得ていると思う。

651　ひさかたの天の露霜置きにけり家なる人も待ち恋ひぬらむ

652　玉守に玉は授けてかつかつも枕と我はいざ二人寝む

この二首は後の歌について、『万葉代匠記』精撰本に、

　此歌の意を按ずるに二人の娘を玉に譬へ、家持駿河麻呂等の聟に約したる人を玉守に譬へて、早く此人どもに娘を与へて何処に有ても待恋んかなど心使をやることなく心安く枕と共に寝むとなり、枕とふたりとは、娘を傍に臥せて守ればそれに対して云へりとあるのが妥当な説のようで、続いて、駿河麻呂の三首の歌（653～655）、更に郎女の六首の歌（656～661）とあるのも、両者の贈答の歌とおもわれる。「玉守に玉は授けて」は、集中例のない表現であるが、母親の心情を率直に吐露し、しかも下句「枕と我はいざ二寝む」と、安心と同時に淋しさの込った結びをしているところなど、歌が実用的な（即ち、聟に娘をよろしく頼むと依頼している点）面での存在感を漂わせていながらも、文学としてすぐれたものとなっている点については、『評釈』が(652)の「評」で

　娘を結婚させた後の親の心は、古来あらゆる親の体験しているものであるが、歌となっているものはきわめて少なく、これはその代表的のものである。

と言う通りである。前歌は、『万葉集全註釈』武田祐吉（以下『全註釈』と略記する）が「評語」で

　今、次の歌と連絡あるものと見て、坂上の郎女が、自分の女子を与えた男に対し、早くお帰りなさい、あなたの新妻なるわたくしの子も、あなたの家で待っているでありましょうとの意をあらわした、母の心の歌として解しておいた。

と言うように理解すべきであろう。ただ、『全註釈』は、後の歌の方を、「従来駿河麻呂に娘を与えた時の作としている。恐らくは家持に嫁せしめた時の作ではなかろうかと思われる。」と説いている。

　ともかく、結婚によって一族の結合を強めていく郎女にとって、「家なる人も待ち恋ひぬらむ」とか、「玉主に玉は授けて」と歌うことで、婿たるものに一種の圧力をかけているように思うのは私だけであろうか。また「ひさかたの天の露霜置きにけり」の大仰な物言いも、娘婿への歌だとする時よく理解されると思うのである。

続いて載せられている駿河麻呂の三首の歌は第一首

653　情には忘れぬものをたまさかに見ぬ日さ数多く月ぞ経にけるを初めとして、全て訪れの間遠になったことの言い訳であるところからみて、事実はいかにもせよ、この歌の配列をした巻四の編者は、郎女と駿河麻呂の贈答（駿河麻呂の歌は表面的には二嬢へ歌いかけている）と考えていたのであろう。

「大伴坂上郎女の歌六首」（656～661）は『評釈』が(661)の「評又」で

　以上六首の歌は、（六五六）にいったがように、坂上家の二嬢から夫駿河麿に贈りまた報える歌を、郎女が代作したものではないかと思われるのである。

と言う考えを採るとすれば、右の六首も、大伴家の内部を治める家刀自の役目を果したのではないかと思うが、この六首については憶則を重ねることになるので、ここまでにする。

天皇に献れる歌（大伴坂郎女、佐保宅にありて作る。）

(721) 足引の山にし居れば風流なみ吾がするわざをとがめたまふな

この歌は、『代匠記』が、

此歌は若帝より艶書など賜たる時仰にも随がはず御返事奉るに付て読て奉る歟。或は処につけたる物など奉るにそへたる歟。

と言い。巻六(1028)の前文及び後文によれば、郎女が獣につけて歌を奉ろうとしているのであるから、と言うことで、従来、『万葉集全注』巻四木下正俊が「我がするわざを」について、

佐保山近くで採れた木の実の類か山の芋、または蔬菜を献ずる際にこの歌を添え、そのことを憚り多い振舞と申し訳したと見てよかろう。

と述べている方向での理解がされてきた。「風流無み我がするわざ」が、田舎人たる自分の奉る物を卑下して付けた歌とするとして、この歌の「評」で、『評釈』は、

しかしてその心としては、貢としての物ではなく、その季節の珍しく好い物を御覧に入れようとしてのことである。歌は儀礼として添えたものである。本来こうした歌は、その物の好さをいい、我がそれを得るための労をいうのが型となっているが、これは天皇に対する臣下としての礼をいっているものである。

と言い、『全註』は「評語」で

達意の歌である。初二句にやや風情があるが、下句が露骨で、うちこわしている。

と言い、『万葉集注釈』沢瀉久孝（以下『注釈』と略記する）は、「考」で、

天皇に対する親愛感と率直な表現がさすがに万葉らしくてよいと評している。郎女にはこの後にも同様の歌（725・726）があるが、天皇に献った女性の歌は、額田王、八代女王(626)のような皇族の場合を別にすれば全く特殊なものである。然し、(528)の左注に「初め一品穂積皇子に嫁ぎ寵びをうくること儔なし。」とあるように、天武天皇の皇子に寵愛された郎女であった。又献られた天皇とは巻四の配列からして聖武天皇と思われ、既に大伴家の家刀自の地位にあった郎女が、聖武天皇に親しく歌を奉る関係にあったことは容易に想像できる。そして、郎女が歌を献った意味は、『万葉集の文学論的研究』久米常民が

そして、彼女が、このように宮廷との接触を保とうとしたのは、主柱のない大伴本家のために、その庇護をうることによって、新興貴族である藤原氏に対して、旧貴族大伴氏の存在を暗に主張しようとしたものと見ることが出来よう。これも家刀自坂上郎女の必死の努力であって聖武後宮文学サロンへの社交的出入であったとばかりは言えないと思われる。

と説くのが至当であると思う。この歌や、(725)・(726)の歌を見るかぎり、郎女が天皇との関係を深めようとする努力を自己犠牲によって成していたとは思えず、むしろ当然の、あるいは或種の陶酔の中で行っていたと考えるのは恣意的に過ぎるであろうか。

天皇に献る歌二首　大伴坂上郎女、春日の里にありて作る。

725　鳴鳥の潜く池水心あらば君にわが恋ふる情示さね

726　外に居て恋ひつつあらずは君が家の池に住むといふ鴨にあらましを

この二首、先に述べたような目的で天皇に献った歌であるが、既に『万葉集古義』鹿持雅澄が

歌意かくれたるところなし、今案ニ此歌、天皇へ献れる歌とせむには、君之家乃と云ること、甚無礼し、

と言い、『万葉集注釈』は、先の(721)を佐保の大伴家の本宅から奉り、この歌は『万葉集私注』土屋文明（以下『私注』と略記する）の説を採用して、坂上家、即ち郎女自身の居宅にあっての作とし、(726)の「考」で

この作は類型の多いもので、すぐ前（七二二）にもあったが、おくれ居て恋ひつつあらずは紀の国の妹背の山にあらましものを（五四四）

の如きは最も相似たもので、「池に住むといふ鴨」はやはり御製によるものと察せられと私注にあるやうに、さうした御作に即答したものと考へる。全注釈には光明皇太后の宣命に「大伴宿祢等波吾族乎母在」（天平宝字元年七月二日、第十七詔）とある事や郎女の母石川内命婦（六六七左注）が久しく宮中に仕へてゐた事を注意されてゐる。いづれにしても明治以後の一部の人達が考へるやうな君臣の間柄とは思へない親しさが示されてをり、この作の題詞と作者とを疑ふ説も出てゐるが、これを疑ふべき論拠は無い。

と述べている。聖武天皇は集中に長歌一首(973)・短歌十首を残しておられ、海上女王や酒人女王へ恋の歌を贈られたり、遠江守桜井王とも親しく歌を詠み交しておられる。しかも、そのうち四首に動物が詠まれ、

赤駒の越ゆる馬柵の(530)　潮干の潟に鶴鳴き渡る(1030)　雁がね(1539)
雁が音(1540)

と、うち三首が鳥関係であるから、坂上郎女に賜わった歌が「鳴鳥の潜く池」や「池の鴨」に関するものであったと考えるのは、それほど的はずれではないと思われる。

天皇を慕う気持が「恋ふる」や「恋ひつつ」のような形をとっているが、歌としては『評釈』が、

郎女としては、その平常の才情を抑え、素朴をきわめた詠み方をしたものであるが、その素朴は、深く心してのものであって、わざと素朴にしたものである。これは天皇に対しまつる臣下としての礼よりである。

と言うように、控えめな歌であると思う。ただ、天皇に対する思いがしみじみと伝わるのは、切実な実感を持っていたからかと思われ、それは前掲の久米常民氏の論文に説くのと同じ理由からだと思われるのである。

冬十一月、大伴坂上郎女、帥の家を発ちて道に上り、筑前の国の宗像の郡の名児の山を越ゆる時に作る歌一首

963　大汝少彦名の　神こそは　名づけ始めけ　名のみを
名児山と負ひて　わが恋の　千重の一重も　慰さめなくに

同じ坂上郎女、京に向う海道にして、浜の貝を見て作る歌一首

964　わが背子に恋ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ恋忘貝

右の歌自体が、一族の誰かに宛てて詠まれたりしたものではないが、題詞から分るように、郎女が大宰府に赴き、天平二年十二月に出発する異母兄・大宰帥大伴旅人に先立って、京に向ったことを証する歌である。(963)の歌は、

1213　名草山言にしありけりわが恋の千重の一重も慰さめなくに

と酷似するし、(963)は、

1147　暇あらば拾ひに行かむ住吉の岸に寄るといふ恋忘貝

と、いずれも巻七の歌を踏まえての作であるから、『万葉集全注』巻第六吉井巌が(963)について「考」のところで

（名のみを）以下五句は、7・一二一三と酷似する。この歌を原歌としてこの長歌が作られたのかもしれない

とあるのが領けるのである。京に向って行く郎女が「苦しみを忘れる為に恋忘れ貝を拾って行こう」と言うのであるから、素直に考えれば、直前に別れた旅人ということになるが、郎女の歌が「恋物語」「文学的虚構」に満ちていることは伊藤博氏が『万葉集の歌人と作品』の「天平の女歌人」の中で述べられるとうりであるので、この二首も「恋の仕立」にはなっているが、異母兄への想いを歌ったものと解したい。その「想い」であるが、旅人の妻大伴女郎が大宰府で亡くなり、そのあと、氏上の旅人の傍にあって家刀自として採配を振り、当然大伴家持（当時十二才）の養育にも当った郎女であってみれば、一族の消長を荷う旅人の安否を気付かってのことと思われる。旅人は、神亀五年(728)頃妻大伴女郎を亡くすが、その二年後、天平二年六月には脚に瘡を生じて重態になり、遺言をするような事態に至る（(566)・(567)の左注）。

然し、幸いにして、大納言に任じられ京に向うことが出来る迄に回復するが、完全に癒えたわけではなかったようである。天平二年十二月に都に帰って七カ月後、天平三年七月二十五日（『続日本紀』）、旅人は六十七才（『懐風藻』）でその生涯を終えた。郎女の心中を慮れば、右のような事実関係からして、僅かな間でも異母兄・旅人と離れることを愁いたのではなかったろうか。更に、当時の政治的状況を見ると、以下のように大伴家にとって極めて厳しいものであった。

1　大伴本家のあった佐保の地にあって、文人達にサロンを提供した、高市皇子の子長屋王が、天平元年二月十日の「私かに左道を学び国家を傾けんとしている」との密告で十一日逮捕され、十二日自尽させられた。ここに新興勢力藤原氏に対抗する勢力は大きな柱を失った。

2　天平元年八月、正三位藤原夫人光明子は立皇后の詔により、臣下としては異例の皇后となった。姉の宮子が文武天皇の夫人となり聖武天皇を生み、光明子がその聖武天皇の皇后となったことにより、藤原氏は大きく勢力を伸長したのであった。

郎女が時代の状況に敏感であったことは、「親族を宴する日に吟う歌」(401)や「尼理願が死去れるを悲しび嘆きて作る歌」(460)・(461)によって窺えるが、その郎女であってみれば右のような時代状況下において旅人を氏上とする大伴氏の将来に極めて危惧を覚えていたとし

ても当然であった。

大伴坂上郎女の、姪家持の佐保より西の宅に還帰るに与ふる歌

(979) わが背子が著る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家に至るまで

(1620) あらたまの月立つまでに来まさねば夢にし見つつ思ひぞ我がせし

大伴宿祢家持、天平十八年の閏の七月をもちて、越中の国の守に任けらゆ。すなはち七月をもちて任所に赴く。ここに、姑大伴氏坂上郎女、家持に贈る歌二首

3927 草枕旅行く君を幸くあれと斎瓮据ゑつ我が床の辺に

3928 今のごと恋しく君が思ほえばいかにかもせむするすべのなさ

更に越中国に贈る歌

3929 旅に去にし君しも継ぎて夢に見ゆ我が片恋の繁ければかも

3930 道の中国つみ神は旅行きもし知らぬ君を恵みたまはな

姑大伴氏坂上郎女、越中の守大伴宿祢家持に来贈する歌二首

4080 常人の恋ふといふよりはあまりにて我れは死ぬべくなりにたらずや

4081 片思ひを馬にふつまに負ほせ持て越辺に遣らば人かたはむも

右八首は、娘大嬢の婿である家持への歌である。久米常民氏が前掲書で

自分が養育して来た本家の嫡男で、しかも自分の娘の聟の、はれの地方官としての赴任の旅立ちは、彼女にとって、感慨無量なものがあった筈である。それは感激であると同時に、その任期中、また都の本家の管理の責任をのがれえないという詠嘆でもあったと思われる。

と言われるように、郎女の歌は一見恋の歌のように見せながら、その実は心からの悲痛な叫びのように思えてならない。(4080)に報えて家持は

4082 天離を鄙の奴に天人しかく恋すらば生ける験あり

と郎女のことを「天人」と尊んでいる。これはもとより「常人」に対しての語ではあるが、軽い気持で戯れたのではなく、遠く越中に来た家持は「恋ひ」と言う他なく郎女の歌に「生ける験」を見たのである。郎女の歌を「仮構の恋歌」（中西進「天平の女たち」『万葉史の研究』）とか、伊藤博氏が『万葉集の歌人と作品』「天平の女歌人」の中で

右のように、坂上郎女が「恋歌」をたのしみ、「恋物語」を地で遊んだ相手は、駿河麻呂一人に限らない。

と言われるように、文学的虚構のなかで把えようとする論が今日一般的であり、それはほぼ当っていると思うのであるが、右八首を読むと、郎女は家持に対して、これ以外の詠み方が出来たとはとうてい思えないくらい、逆説的に言えば、まさしく実用的に切迫する思いを述べているのである。

大伴坂上郎女、族を宴する日に吟ふ歌一首

995　かくしつつ遊び飲みこそ草木すら春は生ひつゝ秋は散りゆく

郎女には「親族を宴する日に吟ふ歌」(401)があって、そこでは大伴駿河麻呂に母親として、二嬢を与える許しの歌を披露したのであったが、この歌は、もっと多くの氏人に対して、家刀自として挨拶をした歌であった。かって、大宰帥として遙かな九州の地にあった異母兄旅人は、「天平二年の正月の十三日に、帥老の宅に萃まりて、宴会を申ぶ」とあるように、「梅花の宴」を開催し、都まで鳴り響くような盛況を博した。この時の事を思って作った歌が巻八の

1656　酒坏に梅の花浮かべ思ふどち飲みての後は散りぬともよし

であることは明かである。又巻三にある、大宰府関係の一群の歌(328)～(351)の中には、旅人の「酒を讃むる歌十三首」があり、「酒飲みて」(341)他、「遊びの道」(347)の語句が登場しているし、同じ一群の中に、

大宰少弐小野老朝臣が歌一首

328　あをによし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり

沙弥満誓が歌一首

351　世間を何に譬へむ朝開き漕ぎ去にし船の跡なきごとし

があって、郎女のこの歌が生れる背景を窺わせるものである。

この歌が詠まれたのは、前後の歌の（特に直後の歌が天平六年の作である）制作年次から、天平五年であることが確実である。第三期の著名な歌人の活動がほぼ終り、山上憶良は恐らくこの年に没したと思われるが、それに反撥するかのように、郎女の作歌が急に多くなる年である。『評釈』はこの歌の評で、

「草木すら」以下は、広い世界の上に、草木と人間とを同列に立たせ、草木の春秋の栄枯を人間に引き当てて比較した心のもので、人間の生命の短かさを暗示したもので、全体としては生きている間をたのしく過したいという心である。仏教的の心から生まれた享楽主義で、時代的な心であったことは、その言葉の単純で、暗示でたりた点からも窺われるが、一首の調べに投げやりな棄てばちな匂いがあって、言っているごときたのしい気分ではなかったことが感じられる。あるいは廷臣としての豪族大伴氏の状態をも反映させている語であり、「親族」の者にはこの心が黙会されたものではなかろうか。

とあるが、まさしくその通りであり、更に言えば、『人間の生命の短かさ』とは、死亡時の年令の如何を問はず、亡き旅人が全員に意識されていたのではなかろうか。

記紀歌謡にも例がある、勧酒歌（主人側が宴を開くにあたり歌うもので、『古事記』の息長帯日売の歌など）であるが、「秋は散りゆく」の中に万感の想いが込められている。

十一年己卯、天皇、高円の野に遊猟したまふ時に、小さき獣都里の中に泄走す。ここにたまさかに勇士に逢ひ、生きながらにして獲らえぬ。すなはち、この獣をもちて御在所に献上るに副ふる歌一首　獣の名は、俗には「むささび」といふ。

1028　ますらをの高円山に迫めたれば里に下り来るむささびぞこれ

右の一首は、大伴坂上郎女作る。ただし、いまだ奏を経ずして小さき獣死斃ぬ。これによって歌を献ること停む

むささびは集中(267)(1367)とこの歌の三首に詠まれているので、この歌

が特に珍らしいものを詠んでいるとは言えないが、聖武天皇の天平十一年、御猟のかこみを破って逃げた獲物で、それに歌を添えて献上しようとしていたら死んでしまったので、歌も差し上げなかった、という状況が興味を引くものである。人に物を贈る時に歌を添えるのは（或いは歌を贈る時に物を添えるのは）平安朝では常識のようなものであるが、この歌を見ると、奈良朝にも、由緒書きめいた歌を付ける習慣があったことが分る。当然のことながら、すぐれた歌とは為りにくいものであるが、『評釈』も言うように「儀礼の歌にすぎないものであるが、それとしてはさわやかさを持っている」し、何よりも、女性として何の憚りもなく、折りを過ごさない歌を献上しようとしたところが注目に価する。「万葉集と上代文化」（『万葉集大成』五）で坂本太郎氏は、天皇遊猟が、仏教との関係から奈良時代にはほとんど行われなかったらしいと推測し、

わづかに天平十二年十一月の和遅野遊猟と同十三年五月の河南観猟との二件を、続紀はのせるのみである。いま十一年に同類の記事一件が加へられるのは、時期の関連から云つて、その頃一時遊猟への関心が動いたと見て不都合でない。

と言うのであるが、その事実とこの歌とどのような関係にあるかはあまりはっきりしない。ただ、天皇遊猟がこの天平十一年から毎年行われたことは、時代としては平穏で、天皇自身が活撥に行動されていたことは明かである。『万葉集全注』巻第六吉井巌は「考」でこの作のように、聖武天皇への贈歌は巻四（七二五～七二六）にもみられる。これが、高級貴族の家刀自と天皇との一般的な関係によるものか、坂上郎女と聖武天皇との場合の特別な関係によるものかはあきらかではない。

と言うが、やはり一般的な関係とは考えにくいし、「特別な」というのがどのようなものかも特定しにくい。結局のところ、郎女の天皇接近の意志が、機会を把えて歌を奉ろうとする結果として現われてくるのではなかろうか。

以上のように、郎女の歌の中で、大伴家の消長に関係すると思う歌について私見を述べて来たが、氏族の内外に対する郎女の働きかけは予想以上に大きい事が分った。しかも、その一族を守り、育んで行こうとする熱情は時として歌の性質を規定し、文学性とも深く関係することが明かになったと思う。

大伴坂上郎女の歌が、どのような文学的存在であるかについて、最も明確に論じた久米常民氏は、「大伴坂上郎女の生涯と文学」（『万葉集の文学論的研究』）の中で、郎女の作品が

巻四の藤原麻呂との贈答歌（522―528）が、古歌を利用することによる「本歌取り」的な手法の作品であり、恋の実用的文書ではなく、「文学」であること

を前提として、この女流作家の『文学』の特質を、

筆者は、彼女の類歌性の一部を本歌取り的手法の作品だと解して、それを彼女の作風の特色の一つであって、若し、それを「遊び」だとして否定してしまうとすれば、彼女をふくめて、第三期の歌人らの、新風をいふものは、発掘されずにうずもれてしまうし、万葉集の文学性はその振幅を極めて狭少にせられてしまうことになることを恐れるのである。

とし、特質の第二は、彼女が酒宴の席で作歌していること（巻三の(397)、巻四の(401)、巻六の(995)、巻八の(1656)など）から

彼女が、酒の席のすぐれた歌の誦詠者、即ち芸能的な「歌びと」であったことが明かになると考える。

と言い、「問答歌」的傾向が強いこと、代作歌のあることを踏まえて

この問答的唱和から、彼女の恋の相手が誰であろうという実生活的臆測をたくましうする好奇心を、坂上郎女の「文学」の名に於て、慎しもうと思うのである。

とし、その結論を次のように導かれる。

そういう意味で、その生涯に相聞歌的な作品以外に作品らしい作品を遺し得なかった大伴坂上郎女という女性は、恋愛・結婚に於ては、極めて不幸な敗残者であったように思われて来る。没落に瀕した大伴氏本家の維持、子女の養育、家持をもり立てることによって、旧名族の体面維持、その財産管理など家刀自的な大役が、彼女を圧倒してしまい、彼女に甘美で満ち足りた恋の美酒に耽溺することをこばみ続けて来たように思われるのである。このはばまれた女性の妄念のようなものが、逆に恋うる相手なしに、あのような美しい相聞歌的作品に昇華したのか、わが坂上郎女の「文学」の実態であったと言いたいのである。

久米氏の論を長々と引用したが、それは今日の坂上郎女論の大筋は、氏の論文に代表されるのではないかと思うし、私も氏の論に賛同するからである。ただ久米氏と違って、「郎女が恋愛・結婚に於ては、極めて不幸な敗残者であったよう」とは思わないのであって、むしろ彼女は、右に氏が述べられたような状況を力に変えて積極的に生きて行くうちに、充実した生涯と、歌作三昧の生活を送ったように思えるのである。本稿では、坂上郎女の歌作の原動力を大伴一族への愛情と考えて、彼女の歌を見て来た。これを踏まえて「坂上郎女の歌の文学性」を追求したいのであるが、それは次稿に譲ることにする。